〈研究・調査報告〉

大学間国際交流協定に基づく短期教員研修留学プログラムの確立（その２）

――高知大学とスウェーデン･イェーテボリ大学間の国際交流促進及び大学の地域貢献を目的として――

是永　かな子

要　旨

本研修の成果と課題を以下のように考察した。第一に研修プログラムに参加する教員の選定については、今回から高知県教育委員会を通じて高知県下の全教職員に呼びかけることができるようになった。今後もこの形態で広報が継続されることは重要であろう。第二にプログラムの時期の調整については、日常業務に支障のない長期休業中という点を考慮すると、現時点では春休みの設定が最善であった。第三に現地でのコミュニケーションについては、複数回の海外渡航経験があることや英語担当教員であることなどの条件が課せられよう。その上で、複数人で参加すること、予備知識を蓄えて研修に入ることなどが望まれる。第四にプログラムの内容については、今回は教員宅へのホームステイや学童保育、就労支援施設、生徒の実習先、研究所、大学など多様な場所を訪問したが、研修希望と合致しなかった部分もあるため、今後も改善は必要であろう。

【キーワード】

大学間国際交流協定、短期教員研修留学プログラム、スウェーデン･イェーテボリ大学、国際交流促進、地域貢献

１．はじめに

本稿は、大学間国際交流協定に基づく短期教員研修留学プログラムの確立（その１）以降の交流について報告する。特に前回課題になった、第一にプログラムの時期の調整、第二に研修プログラムに参加する教員の選定、第三に現地でのコミュニケーション、第四にプログラムの内容に注目して、今回の研修で改善した内容、依然残る課題などについて報告したい。

２．　研修プログラムの時期の調整

平成18年度の派遣についてはプログラムの確立のための協力者として、高知大学教育学部の学部長裁量経費によって渡航費用の一部が資金援助された。しかし平成19年度以降は確立したプログラムを利用した自費による研修活動として位置づくことになった。

短期教員研修留学プログラムは高知大学と高知県教育委員会の包括協定のもと、高知県教育会が広報を担当し、参加者は職免研修扱いすることとなった。その上で、研修に参加することで日常の業務に支障を来すことは避けなければならないことが指摘されたため、長期休暇中の研修実施が検討された。しかし研修実施のための高知県教育委員会との協議に時間がかかったことから、年度の前半には広報することができなかった。その結果、総合的に「春休み」にプログラムを設定することとした。

表１　平成19年度の短期教員研修留学プログラムの日程

12月まで	高知大学と高知県教育委員会との具体的内容の打診・調整
１月上旬	平成19年度の研修プログラム起案
１月７日	高知県教育委員会に依頼文書を送付・広報依頼
２月８日	申請締め切り
２月中	派遣教員を１～２名選考
３月初旬から中旬	事前学習の実施
３月下旬	研修の実施
３月下旬から４月	事後学習の実施

３．研修プログラムに参加する教員の選定

プログラムの参加希望者の事前学習、もしくは応募を考えている教員への情報提供として平成20年１月末に、平成18年度までの研修参加者による「短期教員研修留学プログラム報告会」を企画した。そして短期教員研修留学プログラムの募集要項と報告会の案内を一緒に送付した。

今回は高知県下の教職員に広く周知するため、「大学間協定に基づく短期教員研修留学プログラムによる研修員の募集について（依頼）」の文章を高知大学教育学部長名で、高知県教育長に出した。その文書と「短期教員研修留学プログラムによる研修員の募集要項」を作成し、高知県教育委員会を通じて高知県下の公立学校に周知した。大学の担当窓口は新設された「高知大学教育学部国際・地域連携委員会」とした。

４．研修プログラムの概要

要項に記載された概要は以下の表２の通りである。

表２　平成19年度の短期教員研修留学プログラム概要

主題	内容
事前学習	渡航前に複数回、高知大学において教育学部教員によるスウェーデンの教育の概要についての講習を行う。
研修	一週間程度の期間でスウェーデンを訪問して教育の実際を視察もしくは訪問先で実習をする。 訪問先：スウェーデン国立イェーテボリ大学研究協力校を含む幼稚園・小学校・中学校・特別支援学校等、研修者の興味関心にそった研修先を設定する。 日程：春季休業期間内とする。 訪問目的：教育関係施設の視察もしくは訪問先で実習を行うことにより、スウェーデンの教育の実際を学び、スウェーデンの教育関係者間で討議を行うことにより、日本の教育にいかに還元するかを省察する。
日程案	日程（案） １日目　出発→現地到着 ２日目　視察・実習１日目 ３日目　視察・実習２日目 ４日目　視察・実習の総括（関係者間の討議） ５日目　予備日 ６日目　帰国 ７日目　日本到着
事後学習	帰国後１か月以内に１～複数回、高知大学において本学部教員とともに研修の成果を報告書としてまとめる。可能であれば報告会を行う。

渡航費・滞在費等については参加者の自費である。募集人員は１～２名とした。また課題となっていた現地でのコミュニケーションを考慮して、募集条件に「現地でコミュニケーションをとれる程度の英語力」を課した。これは短期教員研修留学プログラムが毎回大学教員が同行しなくても遂行されることを想定して、自らコミュニケーションをとっていく力が必要であると考えたためである。

１月上旬に高知県下の全ての公立小・中・高等学校に案内が送付され、参加を希望する教員は大学の担当窓口にメールあるいは電話・ FAX で申し込みをすることとした。３名の教員からの問い合わせがあり、そのうち２名の応募があったため、履歴書等による書類選考は行わずこの２名を派遣することとした。

選考結果は、２月26日に高知大学の教育学部長名で各所属の教育長宛に「派遣申請書」を送り通知した。

５．事前学習

本研修プログラムを充実させるため事前学習を設定した。事前学習は２回設定し、第１回は教育学部教員による本研修プログラムの概要説明、スウェーデンの地理・歴史・文化などに関する概略説明及び参考文献の提示、そして高知大学に留学しているスウェーデン人留学生２名とともに挨拶や数字など簡単なスウェーデン語を練習するという内容であった。本研修プログラムは決まったカリキュラムに沿って行われるのではなく、参加者のニーズを取り入れて研修プログラムを設定するため、この事前学習の際に参加者のニーズを聴取した。ニーズに関しては表３に示すとおりである。

表３　平成19年度の短期教員研修留学プログラム参加者

	A	B
所属	公立Ｃ小学校特別支援学級教諭	公立Ｄ中学校英語教諭
教員免許	小・特別支援	中・高（英語）中（国語）
本研修に期待する内容	特別支援教育の実際ー特に支援形態・内容・環境整備。特別支援教育の行政。	小・中連携教育はどのようにしているか。英語教育の初期段階での教育はどのようになされているか。英語の指導法。特別に配慮を要する生徒への支援の在り方。道徳教育、いじめへの対策。ＤＶへの対策。
これまでの海外渡航経験	フィリピン、カナダ、ハワイ、ドイツ、オランダ、インドネシア	イギリス約６年前（10日間） アメリカ約13年前（10日間） カナダ約５年前（１週間） オーストラリア約10年前（３週間）

本研修に期待する内容は多様であったため、特別支援教育を基礎にした研修内容を設定した。第２回は研修内容についての打ち合わせや旅程の内容の確認を中心に行った。また今回は参加者の評価を得るために資料１，資料２に示す事前、事後アンケートに記入してもらった。

６．研修プログラムの内容

研修プログラムは以下の日程で行われた。

本研修プロジェクトの遂行には、イェーテボリ市において以下のメンバーの協力を得た。

今回は事後学習として、アンケート記入とレポートをまとめて提出してもらうこととした。報告会は実施していない。

表４　平成19年度短期教員研修留学プログラムの日程

	都市名	主たる活動
３月21日㈮	高知→関西国際空港→ヘルシンキ→ストックホルム	移動 基礎（小・中）学校教員宅にホームステイ
３月22日㈯	ストックホルム	基礎学校教員宅にホームステイ
３月23日㈰	ストックホルム	基礎学校教員宅にホームステイ
３月24日㈪	ストックホルム→イェーテボリ	移動
３月25日㈫	イェーテボリ	基礎学校・知的障害特別学校・学童保育訪問
３月26日㈬	イェーテボリ	知的障害特別学校訪問 障害者が働くカフェセーベン（Café Säven）訪問・ランチ 障害者の日中活動を保障するスツップベーゲンデイセンター（Stubbvägens dagcenter）訪問 イェーテボリ大学日本語学科講義見学・講義の一部を担当
３月27日㈭	イェーテボリ	障害者雇用国営企業サムハル（Samhall Mölndal）訪問 就学前学校・基礎学校・知的障害特別学校が併設されているオレショーブルン（Öjersjö Brunn）学校訪問
３月28日㈮	イェーテボリ	国立特別教育研究所（Specialpedagogiska institutet）訪問 知的障害高等特別学校に通う生徒の実習先ホテルクステン（Hotell Kusten）訪問・昼食
３月29日㈯	イェーテボリ	自由
３月30日㈰	イェーテボリ→ヘルシンキ→帰途につく	移動
３月31日㈪	関西空港着	移動

表５　平成19年度短期教員研修留学プログラム協力者

所属・役職	役割
ストックホルム市立基礎学校教諭	ホームステイ
イェーテボリ市立基礎学校校長	見学先コーディネート
イェーテボリ大学日本語学科教授および講師	イェーテボリ大学日本語学科講義において交流
イェーテボリ大学日本語学科学生	交流に参加
スウェーデンに留学中の高知大学学生	交流に参加

７．研修の実際

7.1　スウェーデン人教員宅にホームステイ

以下に事後学習として提出されたレポートの記述を中心に研修の実際を紹介する。

「特別学級教員で障害者柔道の指導者でもあるトーマス氏宅にホームステイした。『なぜ障害者に柔道なのか』との質問に、『柔道は体の触れ合いであり、全身を使った運動であること、心・技・体を重視するスポーツであること』などの回答があり、納得した」。「滞在期間がイースター休暇中であったためイースターならではの家庭料理をお願いしていたところ、幾種類ものパンとチーズ、有名な肉団子、キャビア、ワインなどをたっぷり用意してくださり恐縮しながら堪能させて頂いた。何か日本料理を食べてもらおうと思い、炊き込みご飯、和風スープ、サラダ、ポトフなどを作って食べて頂いた」と、スウェーデン人がスウェーデンにおいて障害者に柔道を教えていることについて聞き、新たな発見があったこと、料理などを通して、ホームステイならでは文化交流がなされたことがうかがえる。

7.2　基礎学校・知的障害特別学校見学・学童保育を訪問

「イースター休暇中であったため、通常小・中学校としての基礎学校と知的障害特別学校の施設見学と隣接する学童保育の訪問を行った。特別学校の教室は特に行き届いた構造化がなされていた。スケジュールを登校時に全員で黒板を使って確認する、各学習内容スケジュールをマジックテープで個人スペースに提示する、休息スペースと娯楽スペースを分けているなどがその

写真１　学童保育に来ていた子ども

写真２　個別学習内容スケジュール表

一例である。教材教具は必要に応じて取り出せるよう、教材室がある。通常教室を苦心してそれぞれのスペースを区切り分けている日本の教室の不便さを思い、将来的にはこうした教室作りができるよう働きかけていきたい。通常学校の隣にインクルージョンの考え方を具体化した形で特別学校がある」などの感想が示された。

他にも「今回のテーマである読字障害への支援の手立てについてヒントが得られた。例えばｂとｄは読字障害のある学習者にとっては識別が難しく、この教室ではこのような字を視覚的に強調したパネルが貼られてあった。また個別支援体制が整っていて、それぞれの子どもが個別ブースで集中できるようにスペースが与えられていた。同時に一緒にも遊べるように、各教室の空間は中央の１つの空間に繋がっていて、交流できるようにも工夫されていた。アスペルガー症候群の子どもへの支援の仕方も学べた」と実際の授業場面は見ることはできなかったものの、ハード面の整備状況を見学することができたようである。

併設する就学前教育機関も見学した。「就学前教育が同一学校で行われているとのことで、５，６ヶ月の乳幼児が教育相談に来ていた。週１回程度で訪問し､観察を行ったり遊ばせたりしながらの育児教育相談のようであった。母親の表情が明るく穏やかだったことが印象的だった」と就学前の支援と学校教育が連続体として提供されている様子を目の当たりにしていた。

「特別学校の隣の棟では通常学校である基礎学校の子どもたちが学童保育中で、そりすべりを楽しんだり昼食に向かったりしていた。教育を受ける場はそれぞれのニーズに合う場で受けるが、生活は一緒で、それがあたり前の生活のようだった」と、場の統合についても学んでいた。

写真３　教育相談にきていた子ども

7.3　知的障害特別支援学校訪問

「知的障害のみならず、肢体不自由や視覚障害等との重度重複障害児対象の学校である。十分な支援がなければ寝たきりになるだろうと思われる児童

が３名、学童保育としてのケアを受けていた。補助具がたくさんあり、それらは一人ひとりのニーズに合ったオーダーメイドの物であるが、費用は国費だという。ベットからの移動時に使うリフトも非常に使いやすそうに見えた。また直立姿勢をとる補助具も利用する児童に合わせた物が用意されており、子ども一人に一名の支援教員がついていた」と、福祉国家における障害児の待遇に驚いた様子である。

また「情緒を安定させるために工夫された部屋があり、リラクゼーションのための器具など体験した。浴槽状のものに小型発泡スチロールボールが入っていて、その中に体を埋めてリラックスできる。もう一つは電源を入れると色とりどりの光線を帯びるビニール糸がシャワーのようにつるされたコーナーがあり、癒される音楽と共にその光線が流れるようになっている。その中に身を置くと不思議な安らぎを感じられる装置だった。発達障害児のパニックをクールダウンするのに役立つかもしれないと思った」と、スヌーズレン[1]の部屋も整備されていたようである。

7.4　障害者が働くカフェセーベン訪問

「厨房、レジ、ウェイトレスも、20代であろう女性の障害者が、笑顔で働いていた。支援者も見守りながら働いている。店の中の雰囲気は一般のカフェと変わらない。違いと言えば入り口のコーナーに作業所で作られた作品が展示販売されていた点で、40センチほどもあるカラーローソクが非常に安く売っており、手芸作品も一般より安いようだった。『障害者が働いているところだから利用してやろう』ではなく『今日はここのランチを食べよう』という感覚で利用している様子がとても良いと思った」ように、ノーマライゼーション[2]の具体化が感じられたようである。

7.5　障害者の日中活動を保障するスツップベーゲンデイセンター訪問

「知的障害児の特別学校を卒業した若者達が絵画やクラフトを作成し、それを販売していた。カウンター内ではオリジナル作品を描いている人もいれば、型染めのようにして製品を作っている人もいる。オリジナルの作品を書いている人は社会的に高い評価を得ている方らしく、受賞場面が載った新聞を見せてくれた。障害の有無にかかわらず人の心に届く絵画作品が生まれ、このような形で評価されていると感じた。奥の厨房ではパンやケーキ類も作られるようになっており、スタッフにサポートを受けながらティータイムの

準備をしている人もいた」と、日中活動の保障の場として、そして芸術作品が生まれる場としてのデイセンターの存在について知ったようである。

7.6　イェーテボリ大学日本語学科講義見学および講義の一部を担当

「この日、日本語学科で日本語の模擬授業をすることになっていたため準備をしてきたのだが、到着早々行った打ち合わせの結果、翌日に試験を控えているとのことで、夜間コース１時間目の見学と２時間目の学部長の授業の中で日本の名前についての説明を15分間英語で行うことになった。大学生相手に授業をするのは度胸がいったけれど、質問もしてくれて、結構興味を持ってくれたのではないかと思う」。と、授業１コマを担当することができなかったが、授業の見学と模擬授業を少し行うことができたようである。

7.7　障害者雇用国営企業サムハル訪問

「はじめに１時間ほどサムハルについての詳しい説明を受ける。障害者が社会保障として保護されるのではなく自立して社会参加していける社会システムとして、30年前から作られたことには驚いた。現在は国内に250カ所もあり、個々の障害や可能性に合う仕事を探して、一般企業に雇用を作り社会へと移行、また作業所として企業から仕事を取ってくることで、一般企業への移行が困難な人の仕事と収入を確保するなど多様な対応をしながら経営している。日本もこのような形が作り出せないものかと考えた」。「その後、施設内の見学をさせてもらった。指導員がついて多くの人たちが働いていて、期限切れの電池替え、ラベル替えなど、みんな能力に応じてできることを頑張っていた。パソコンの技能習得のための講習や、クリーニング作業の説明会も行っていた」と、日本のシステムでは弱い公的な援助、保護雇用について見学し、日本の現状を省みることもできたようである。

7.8　就学前学校・基礎学校・知的障害特別学校が併設されているオレショーブルン学校訪問

「場の統合がされている中での特別学校で、指導に当たっている教員とアシスタントの方に話をうかがったが、教室は物理的に構造化され、個別支援がきっちりと行われており、興味深い教材も多々あった。担当の教員達は英語が流暢というわけではなかったため、意思疎通は時間がかかったが、一生懸命説明してくれてここでも何とか英語でだいたいのことが分かった。ここ

は建物が綺麗だったが校舎などは、自分たちでアイディアを出し合って作ったという」。「ポートフォリオの取り組みからは個々の子どもがどのように成長しているかがよく分かった。見せてもらったポートフォリオファイルは日本の総合学習のような内容が閉じられていて、衣服について繊維から学んでいた」。「自閉症やアスペルガー症候群の子どもを対象に、ソーシャルストーリーの取り組みも行っており、インクルージョン教育のあるべき姿を垣間見た」。と、テーマ学習、個別の支援計画としてのポートフォリオ、ソーシャルストーリーの実践について話を聞いていた。

7.9　国立特別教育研究所訪問

「この場所は大きな郵便局の２階部分にあった。職員の方がにこやかに出迎えてくださり、施設の目的などを、パワーポイントを使って英語でプレゼンテーションされた。インクルージョンの考え方に変わってきた経過や、この研究所がどのような役割を果たすのかが分かった。現場の教員だけでなく、保護者からの問題提起や相談があればそれについて研究所は支援内容や環境整備等について、専門家の意見も聞いてアドバイスし、財政的な必要があれば国レベルや自治体レベルの支援まで実施できるようにするということだった」。「スウェーデンも教育システムの変遷があって、支援が必要な子どもや成人は、以前には支援から取り残されているような事態が生じていたが、現在では様々な支援体制が整備されていると言うことであった。研究所を中心として、各地域、学校、施設へ様々な支援・援助を行っている。読字障害の支援のための文献、資料も豊富にあった」「かなり専門的な内容だったので全部理解しようと思えばかなりの英語力が必要であろう。話をビデオにとって、あとからもう一度聞き直すようにもした。話の内容は英語の私の専門分野でないこともあり、わかりにくいところも多かったけれど、周囲の人に教えてもらいながら、何とか理解をしようと試みた」。と子どもと保護者、そして学校支援の中枢である研究所の視察を行った。英語担当教員は特別支援学級担当教員と協力しつつ、内容の理解に努めていたようである。

写真４　研究所の展示スペース

7.10　知的障害高等特別学校に通う生徒の実習先ホテルクステン訪問・昼食

「普通の小綺麗なホテルという印象で、ホールの壁に掛けられている生徒達が書いた美しい絵画は、販売もされているという。宿泊はもちろん会議や結婚式も行っている。ここで働いているスタッフの内生徒は訓練を兼ねていて、ここでの仕事が自立支援の場としても位置付いていた。日本でもちょっとした喫茶コーナーなどで障害者が働いているのを見かけるようになってきたが、バリアフリーの社会になるためにもこのような施設が公的に必要ではないかと考えた。実習生も特別扱いはしないので、それなりにクオリティが要求され、厳しさのある実習先である」。「レストラン部門では一般のお客さんが食事だけにも訪れていて、私たちもビュッフェスタイルの昼食をご馳走になった。入り口にはインクルージョンの考え方をアピールする障害児・者の絵や写真がディスプレイされているが、それ以外は通常のホテルとほぼかわらない。実習に耐えられない人もいるが、様々な支援をしながら一般の職場へと就職を果たすこともできているようだった」と、通常の環境の中で障害児・者が働いている様子に感銘を受けていたようである。

８．おわりに

前回の課題の柱に従って、アンケートも参照しつつ、記述する。

第一にプログラムの時期の調整については、日常業務に支障のない期間に限定されるため、長期休業中になってしまう傾向がある。しかし、夏休みは８月の下旬からしかスウェーデンの学校が再開せず、新学期の訪問は歓迎されないこと、飛行機チケットが高額になってしまうこと等が課題となろう。冬休みはやはりスウェーデンの学校も冬休みになってしまう。春休みは今回のようにイースター休暇と重なってしまうことやアンケートにもあるように日本の学校も年度末で多忙であること等が予想され、時期の調整は容易ではない。しかし、現時点では総合的に春休みの研修設定が最善であるようだ。

第二に研修プログラムに参加する教員の選定については、今回から高知県教育委員会を通じて高知県下の全教職員に呼びかけられるようになった。しかし、今回は周知期間が短かったこと、実績を積まなければ本研修制度が浸透しないことなどから、問い合わせや申し込みは少なかった。今後このような形態で広報が継続され、派遣実績を積んでいくことが重要であろう。

第三に現地でのコミュニケーションについては、短期教員研修留学プログラムが大学教員の同行を前提としていないことから、今回のように海外渡航

経験が複数回ある、英語担当教員であるなどの条件が課せられるであろう。それでも英語のみの環境で理解して行動することは容易ではないので、今回のように複数人で参加してお互いに協力すること、予備知識を蓄えて研修に望むこと、分かること分からないことをはっきりさせるコミュニケーションが重要なことを認識すること、積極的にかかわっていくこと、現地の日本人の協力を仰ぐことなどの対応策が考えられる。

第四にプログラムの内容について、今回はスウェーデンの学校がイースター休暇中であったため、学校の授業の様子は見学できなかった。しかし教員宅へのホームステイや学童保育、就労支援施設、子どもの実習先、研究所、大学など多様な場所を訪問することができた。中には打ち合わせが十分でなかったり、主たる研修希望と合致しなかったりしたこともあって、予定通りではなかった部分もある。今後も参加者の希望を聴取しつつ柔軟に対応することを前提に、高知大学とイェーテボリ大学の協定に基づいて本研修プログラム運用がされるように改善を心がけることが重要であろう。

研修プログラム自体の目的についても検討したい。「国際性を身につける」に関しては、視察先で自ら英語で対応せざるをえない状況が多かったため、「何とか乗り切る」など大変な場面もあったが、全体的には国際性を身につける活動であったと参加者は評価している。また自らの学んでいるシュタイナー教育の話になり、同行してくれたスウェーデン人教員の娘が働くシュタイナー教育の学校を訪問したり、その教員宅に訪問して親交を深める活動にも発展したりしたようである。

「日本とは異なる教育形態を学ぶ」に関しては、英語教員が特別支援教育を学ぶなど今まで知らなかった分野について考えたり、実践について話を聞いたりする際に日本ではどうであろうかとの省察も行われたりしていた。今後は学んだことをいかに日々の実践と結びつけ、試行し、日本流にアレンジするかなどの工夫が期待される。

大学にとっての「国際交流の促進」に関しては、このような形態で教員の研修プログラムが準備されることについては参加者の評価が高かった一方、交流協定に基づいた活動にするにはより丁寧な打ち合わせ、具体的な内容の確認がいっそう必要であるとの意見が示された。

「地域貢献」に関しては、高知県教育委員会との協議においても本研修プログラムは、新たな研修の機会が増えることとして歓迎され、運営においても協力することができた。派遣された教員が学んできたことを実践したり、

日々の実践を通して本研修内容について省察したりすることによって、高知県の教育力向上としての地域貢献に寄与することが望まれる。

今後の課題は、前回明らかになった課題も継承しつつ、より組織的な交流として実績を積んでいくことであろう。試行錯誤を続けながらも、交流する対象者や領域の幅の拡大、交流内容の多様化を推進する必要がある。

参考文献

1　河本佳子（2003）『スウェーデンのスヌーズレンー世界で活用されている障害者や高齢者のための環境設定法ー』新評論.

2　ベンクト・ニィリエ著、河東田博他訳編（2004）『ノーマライゼーションの原理ー普遍化と社会変革を求めてー』現代書館.

これなが　かなこ
（高知大学教育研究部人文社会科学系教育学部門准教授・
高知発達障害研究プロジェクト研究員）

資料１

短期教員研修留学プログラム参加者アンケート

記入者Ａ

事前　記入日平成20年３月20日
事後　記入日平成20年４月８日

事前アンケートの選択項目は（　　）事後アンケートの選択項目は（　　）で示している。

Ⅰ．プログラムの内容についてお答えください。以下は当てはまるものに○をつけてください。

１．事前学習は十分でしたか。
①とても思う　②思う　③少し思う　④どちらともいえない　⑤あまり思わない　⑥思わない　⑦全く思わない
例えばどのようなことについてそう感じますか(事前：スウェーデンの概要、特別支援教育の概要、イェーテボリの概要などがガイダンスと書籍によって知り得た。また留学生のお話で具体的イメージが持てた。事後：ありがたかったが、英語力が不十分。帰りの時差のため飛行機に乗り遅れそうになったため。)

２．研修先は興味関心を反映していましたか。
①とても思う　②思う　③少し思う　④どちらともいえない　⑤あまり思わない　⑥思わない　⑦全く思わない
例えばどのようなことについてそう感じますか(事前：季節。イースター休暇中であることが残念だが、学校特別支援教育、国立教育研究所等の見学を組んでいただいていること、サポートしてくださる方の依頼等で感謝している。事後：社会基盤、教育・福祉・医療等の考え方、実際が非常に参考になった。)

３．研修の内容は期待しているものですか。
①とても思う　②思う　③少し思う　④どちらともいえない　⑤あまり思わない　⑥思わない　⑦全く思わない
例えばどのようなことについてそう感じますか(事前：同上。事後：無記入。)

４．研修の期間は十分ですか
①とても思う　②思う　③少し思う　④どちらともいえない　⑤あまり思わない　⑥思わない　⑦全く思わない
例えばどのようなことについてそう感じますか(事前：無記入。事後：体力的にこれくらいが限度、長くあるならゆっくりできた。)

５．教員と協議する機会はあると思いますか
①とても思う　②思う　③少し思う　④どちらともいえない　⑤あまり思わない　⑥思わない　⑦全く思わない
例えばどのようなことについてそう感じますか(事前：無記入。事後：無記入。)

６．研修を日本の教育に還元することを考えることができると思いますか
①とても思う　②思う　③少し思う　④どちらともいえない　⑤あまり思わない　⑥思わない　⑦全く思わない
例えばどのようなことについてそう感じますか(事前：環境の構造化と教材・教具、二次障害などについて、新たな視点が持てそうに思うので。事後：あまりに違うのであてはめることができないが素晴らしい。)

７．事後学習が必要だと思いますか
①とても思う　②思う　③少し思う　④どちらともいえない　⑤あまり思わない　⑥思わない　⑦全く思わない
例えばどのようなことについてそう感じますか(事前：無記入。事後：１と同じ。)

８．自分自身がこの研修で何を得ようとしているかが具体的ですか
①とても思う　②思う　③少し思う　④どちらともいえない　⑤あまり思わない　⑥思わない　⑦全く思わない
例えばどのようなことについてそう感じますか(事前：特別支援教育、環境問題等、イメージできたので。事後：無記入。)

９．本研修が自分の教員としての専門性を高めるものであると思いますか
①とても思う　②思う　③少し思う　④どちらともいえない　⑤あまり思わない　⑥思わない　⑦全く思わない
例えばどのようなことについてそう感じますか(事前：無記入。事後：特別支援教育の実際を進めるにあたって。)

10．内容が「短期教員研修留学プログラム」として適切ですか
①とても思う　②思う　③少し思う　④どちらともいえない　⑤あまり思わない　⑥思わない　⑦全く思わない
例えばどのようなことについてそう感じますか(事前：学年末事務処理超多忙な時期、２人のみのメンバー、経済的負担、自己責任の大きさ。事後：多少先方のことが分かった方が解説なり、通訳なりをしてくださればより理解できたのでは。)

Ⅱ　「短期教員研修留学プログラム」の目的について
１．この活動は国際性を身に付ける活動であると思いますか
①とても思う　②思う　③少し思う　④どちらともいえない　⑤あまり思わない　⑥思わない　⑦全く思わない
例えばどのようなことについてそう感じますか(事前：グローバルな視点、ノーマライゼーションや国の制度上のこと等、カルチャーショックありかと。事後：スウェーデンのこと、ヨーロッパのこと、文化や人やものに触れ違いと共に「同じ」も感じ、学ぶことがあった。また外から見た日本の良さも再び感じることができた。)

２．この活動は日本と異なる教育形態を学び、幅広い教養を身につける機会になると思いますか
①とても思う　②思う　③少し思う　④どちらともいえない　⑤あまり思わない　⑥思わない　⑦全く思わない
例えばどのようなことについてそう感じますか(事前：同上。事後：同上です。)

３．この活動は大学を通じた国際交流の促進に位置付けられると思いますか
①とても思う　②思う　③少し思う　④どちらともいえない　⑤あまり思わない　⑥思わない　⑦全く思わない
例えばどのようなことについてそう感じますか(事前：分野が狭いので多様な分野の方がメンバーにいるとより良いように感じる。事後：大学間という点ではイェーテボリ大学は全く関知してくださいませんでしたが、高知大学を通じての国際交流にはとてもつながっていくでしょう。)

４．この活動は高知大学の地域貢献に位置付けられると思いますか
①とても思う　②思う　③少し思う　④どちらともいえない　⑤あまり思わない　⑥思わない　⑦全く思わない
例えばどのようなことについてそう感じますか(事前：地域学校のサポートになる部分が大きいとは思います。ただ個人として参加する感が強い。事後：学んできたことを自分のベースで活かし、教育に活かすことは地域貢献に繋がる。例えば国営企業サムハルは県営、市営でもできる。)

資料２

短期教員研修留学プログラム参加者アンケート

記入者Ｂ

事前　記入日 平成20年３月20日
事後　記入日 平成20年４月８日

事前アンケートの選択項目は（　　）事後アンケートの選択項目は（　　）で示している。

Ⅰ.プログラムの内容についてお答えください。以下は当てはまるものに〇をつけてください。

１．事前学習は十分でしたか。
①とても思う　②思う　③少し思う　④どちらともいえない　⑤あまり思わない　⑥思わない　⑦全く思わない
例えばどのようなことについてそう感じますか(事前：とても慌ただしかったので。十分とは言えない。事後：もっとスウェーデン語を勉強しておきたかったし、いろいろと調べておきたかった。)

２．研修先は興味関心を反映していましたか。
①とても思う　②思う　③少し思う　④どちらともいえない　⑤あまり思わない　⑥思わない　⑦全く思わない
例えばどのようなことについてそう感じますか(事前：支援が必要な生徒への指導のヒントをもらえそうだから。事後：英語教員としても英語が活かせたし、英語学習の在り方を知ることは興味深い。)

３．研修の内容は期待しているものですか。
①とても思う　②思う　③少し思う　④どちらともいえない　⑤あまり思わない　⑥思わない　⑦全く思わない
例えばどのようなことについてそう感じますか(事前：いろんな面で視野を広げられそうだから。事後：いろんな面での整備がされるといろんな点で意義深いものとなるだろうから。)

４．研修の期間は十分ですか
①とても思う　②思う　③少し思う　④どちらともいえない　⑤あまり思わない　⑥思わない　⑦全く思わない
例えばどのようなことについてそう感じますか(事前：それ以上だといろんな面で無理なことが出てくるので。事後：短期なので行ける面があるので。)

５．教員と協議する機会はあると思いますか
①とても思う　②思う　③少し思う　④どちらともいえない　⑤あまり思わない　⑥思わない　⑦全く思わない
例えばどのようなことについてそう感じますか(事前：大学の方でコーディネートしてくださったから。事後：ホームステイ先が学校の先生だったし、現地の先生方と一番多く話したから。)

６．研修を日本の教育に還元することを考えることができると思いますか
①とても思う　②思う　③少し思う　④どちらともいえない　⑤あまり思わない　⑥思わない　⑦全く思わない
例えばどのようなことについてそう感じますか(事前：より良い方法を身につけて知っていると自分の思考や教育方法に深みが増すから。事後：英語教諭としても実践力を高められるし、特別支援教育に対する勉強になり、視野も広がり、さらに自身の学ぶ意欲も高まった。)

７．事後学習が必要だと思いますか
①とても思う　②思う　③少し思う　④どちらともいえない　⑤あまり思わない　⑥思わない　⑦全く思わない
例えばどのようなことについてそう感じますか(事前：研修して得た情報の整理、後のメンバーのため。事後：研修して得た情報の整理、後に続くメンバーのため。)

８．自分自身がこの研修で何を得ようとしているかが具体的ですか
①とても思う　②思う　③少し思う　④どちらともいえない　⑤あまり思わない　⑥思わない　⑦全く思わない
例えばどのようなことについてそう感じますか(事前：もう少し早くから準備した方が良かった。事前学習の時間が十分でない。事後：事前学習の時間が十分でなかったが、短期研修の割には。)

９．本研修が自分の教員としての専門性を高めるものであると思いますか
①とても思う　②思う　③少し思う　④どちらともいえない　⑤あまり思わない　⑥思わない　⑦全く思わない
例えばどのようなことについてそう感じますか(事前：ヨーロッパの一流と言われる大学の実践を視察する機会はなかなかないから。事後：無記入。)

10．内容が「短期教員研修留学プログラム」として適切ですか
①とても思う　②思う　③少し思う　④どちらともいえない　⑤あまり思わない　⑥思わない　⑦全く思わない
例えばどのようなことについてそう感じますか(事前：こういうチャンスでもないとなかなか行けないから。事後：こういうチャンスでもないとなかなか行けないから。)

Ⅱ「短期教員研修留学プログラム」の目的について
１．この活動は国際性を身に付ける活動であると思いますか
①とても思う　②思う　③少し思う　④どちらともいえない　⑤あまり思わない　⑥思わない　⑦全く思わない
例えばどのようなことについてそう感じますか(事前：行ったことのない国の大学を視察し、人々との交流を通して学べることは意義深いから。事後：コミュニケーションの手段としては主に英語が使われる。一方で、その国の言語についても学べるので比較もできて興味深い。様々な他国の文化を理解しようとする姿勢が国際理解には大切だから。)

２．この活動は日本と異なる教育形態を学び、幅広い教養を身につける機会になると思いますか
①とても思う　②思う　③少し思う　④どちらともいえない　⑤あまり思わない　⑥思わない　⑦全く思わない
例えばどのようなことについてそう感じますか(事前：視野を広げ、外国語教員としての経験を活かせると思う。事後：参加したことを通じて、今まで知らなかった様々なことを学べたから。)

３．この活動は大学を通じた国際交流の促進に位置付けられると思いますか
①とても思う　②思う　③少し思う　④どちらともいえない　⑤あまり思わない　⑥思わない　⑦全く思わない
例えばどのようなことについてそう感じますか(事前：大学の先生がコーディネートしてくださる取り組みが新鮮。大学のレベルもすごく上がるのでは。事後：高知大学の先生は頑張ってくれたけど、イェーテボリ大学の方はこの活動に理解があったとは思えにくかったから。しかし、きちんと相互理解ができていればより良いものとなると思います。)

４．この活動は高知大学の地域貢献に位置付けられると思いますか
①とても思う　②思う　③少し思う　④どちらともいえない　⑤あまり思わない　⑥思わない　⑦全く思わない
例えばどのようなことについてそう感じますか(事前：一般の教員が気軽（？）に参加できるところ。教員の資質が上がれば生徒に還元されるから。事後：本交流を通じて人と人とをつなぐ、よりよい実践方法の伝達等。)